

# 決定詞付き自由関係節の派生について

平塚哲郎

## 1. 導入

英語の決定詞付き自由関係節 (DHFR)とは、標準的自由関係節に *a* や *the* のような冠詞がついたものを指す。

- (1) ... That is *the what you do against the Rams these days*. (adopted from Nakamura (2009:330))

Nakamura (2009)によると、(2a)に示すように標準的自由関係節では関係節の積み重ねが不可能である一方、(2b)の通り DHFR では可能である。

- (2) a. \* I bought [DP *what Mary recommended* [Rel *that I could afford*]]. (MacCawley (1998: 457))

- b. There's a collar and [*a what they call a <unclear>* [Rel *which is a protein tube*]] and ...  
(adopted from Nakamura (2009:339))

また、(3a)のように、標準的自由関係節では先行詞内削除 (ACD)を適用することが可能だが、(3b)の DHFR では不可能である。

- (3) a. Thus Barth continues to read *what he does* [read] out of Genesis, ... (adopted from Nakamura (2009:343))

- b. \* Thus Barth continues to read *the/a what he does* [read] out of Genesis, ...

本論の目的は、Nakamura が観察した DHFR の(2b)と(3b)の特性に説明を与えることである。

## 2. 先行研究とその問題点

Nakamura (2009)は、DHFR は制限的關係節 (RR)と似た振る舞いを示すため、これらが同様の構造を持つと分析している。さらに、DHFR で使用される *what* は標準的な自由関係節とは異なり、*wh-*と*-at* に分解されると主張している。DHFR と RR はそれぞれ(4a,b)の構造を持つ。

- (4) a. [DP *the/a* [NP *-at*<sub>j</sub> [CP [DP *wh-* *-at*<sub>j</sub>]<sub>i</sub> C [IP ... [DP *wh-* *-at*<sub>j</sub>]<sub>i</sub> ...]]]

- b. [DP *the/a* [NP *book*<sub>j</sub> [CP [DP *which book*<sub>j</sub>]<sub>i</sub> C [IP ... [DP *which book*<sub>j</sub>]<sub>i</sub> ...]]]

*wh* 句 (DHFR では *wh-**-at*、RR では *which book*) が CP 指定部に移動した後、名詞句 (DHFR では *-at*、RR では *book*) が CP 指定部外へさらに移動して、関係節に修飾される主要部となり、関係節が完成する。

関係節の積み重ねに関して、Nakamura は、CP が N の制限的修飾句であると仮定しており、それゆえ、CP に修飾されうる名詞句 (*-at*)を有する DHFR では関係節の積み重ねが可能であると分析している。しかし、(2b)は(5b)のような透明的自由関係節 (TFR)であり、これは関係節内にある小節の補部が節の主要部となる特殊な構文である。

- (5) a. \* There is *what you ordered on your desk*. (Wilder (1998: 686))

- b. There is *what John might call a banjo on his desk*. (Schelfhout et al. (2004: 2))

- (6) a. There's *what they call a straw which is a protein tube*.

- b. There is *a what John might call a banjo on his desk*.

(5a)にあるように、*there* 構文で標準的自由関係節は使用不可能である一方、(5b)のように TFR は使用可能である。これは、この関係節の主要部が節内にある不定の *a banjo* であるからである。(2b)が TFR であると考えられるのは、(6a)のように、DHFR の冠詞を取り除いても *there* 構文で使用可能であるためである。さらに(6b)が示す通り、TFR には冠詞をつけることが可能である。これらの事実から、(2b)は不定名詞 *a straw* が主要部である TFR の一種と分析される。標準的自由関係節に積み重ねをした(7)のような DHFR は非文となる。

- (7) \* I'm going to sell *the/a what I bought that Mary had recommended*.

Wilder (1999)や Matsuyama (2018)は、TFR では小節とその補部が別々の構成素を形成していると分析しており、そう仮定すると(2b)は(8)の構造を持つ。

- (8) There's a collar and [*a* [*what they call*] [*a straw* [Rel *which is a protein tube*]]].

よって(2b)では、関係節は DHFR そのものではなく、主要部 *a straw* を修飾していると考えられるため、Nakamura の観察は適切でないといえる。

また、DHFR では ACD が不可能であるという(3b)の事実を説明するため、Nakamura は(9)のように *-at* が *SOME* と *THING* に分解され、冠詞の補部位置に *THING* が移動すると分析している。

- (9) [VP1 read [DP *the/a* [NP *THING* [CP [DP *wh-* [NP *SOME* [N *THING*]]]]]]

- he does [VP2 read [DP *wh-* [NP *SOME* [N *THING*]]]]]]]]]

Sauerland (2004)に基づき、Nakamura は先行詞の VP1 と削除を受ける VP2 の目的語が意味的に同一であれば ACD が可能であると仮定している。この仮定に従うと、(9)において、先行詞となる VP1 の目的語は *THE THING* とな

っているが、削除を受ける VP2 では *wh SOME THING* となっており意味的に同一ではない。よって非文となる。

この分析は、*-at* を分解しないと目的語が同一となり ACD が可能と予測してしまうため、さらなる分解を必要とする。しかし、このような複雑な仮定はできる限り無くすべきであろう。さらに ACD では、削除を受ける VP が先行詞となる VP に含まれており、削除を受ける VP を復元するとその中にまた削除を受けた VP が含まれてしまうため、延々と復元が終わらないという *regress problem* がある。この問題が Nakamura の分析では考慮されていない。

### 3. 提案と分析

本発表では、Nakamura のような *what* を分解する方略は採用せず、標準的な自由関係節 (CP) に *a* や *the* などの冠詞 (D) が併合するという単純な構造を提案する。

(10) [DP the/a [CP [DP what]<sub>i</sub> C [IP ... what<sub>i</sub> ... ]]]

これを基に、Nakamura が分析した DHFR における関係節の積み重ねと、ACD が不可能であることを説明する。

まず関係節の積み重ねに関して論じる。(11)は関係節が NP を修飾することを示している。(12)は(7)の構造を表している。

(11) a. The *theory of light* that Newton proposed was less successful than the **one** that Huyghens proposed. (McCawley (1998:382)

b. The *theory of light* that Newton proposed that everyone laughed at was more accurate than the **one** that met with instant acceptance. (McCawley (1998:382)

(12) \* I'm going to sell [DP the/a [CP<sub>1</sub> what<sub>i</sub> [IP I bought t<sub>ij</sub>] [CP<sub>2</sub> [DP Op t<sub>CP1j</sub>] that [IP Mary had recommended t<sub>ij</sub>]]].

不定代名詞 *one* は NP (N') を代用して使用できる。(11a)において関係節の主要部 *theory of light* が *one* によって代用され、この *one* に関係節が付加している。さらに主要部 *theory of light* に関係節が積み重なった(11b)でも、*one* による代用が可能である。よって関係節は NP を修飾するものであると考えられる。このことから、(12)が示す通り、*what* は CP 指定部に位置しており、制限関係節 (CP2) は NP を修飾していないため非文となると説明できる。

次に ACD を分析する。まず Sauerland (2004) は、2 節で言及した *regress problem* を解決するため、(13b)のように先行詞となる VP1 の目的語を数量詞繰り上げ (QR) し、VP1 と VP2 の目的語が意味的に同一である必要があると主張している (DP の移動の元位置にはその DP を構成する NP のコピーのみが残ると仮定している)。

(13) a. \* Polly [VP<sub>1</sub> visited every town] in every country Erik [VP<sub>2</sub> did (= visit every country)] (Sauerland (2004: 64))

b. \* [every town in every country<sub>i</sub> Erik did [VP<sub>2</sub> visited country<sub>j</sub>]]<sub>i</sub> [Polly [VP<sub>1</sub> visited town<sub>j</sub>]]<sub>i</sub>

(13)では、*visit* の目的語が意味的に異なっているため非文である。(3b)が示す通り DHFR において ACD を適用することは不可能であったが、本発表では、Sauerland (2004) に従い、VP1 の目的語 (*the/ a what ...*) を QR し、先行詞の VP1 に残るコピーには CP である *what* 以降は含まれず、*the* や *a* のコピーが残ると仮定する。よって(3b)は(14)の構造を持つ。

(14) [DP the/ a [CP what<sub>i</sub> he does [VP<sub>2</sub> read [DP what<sub>j</sub>]]]<sub>i</sub> [Barth continues to [VP<sub>1</sub> read [DP the/a<sub>j</sub>]]]<sub>i</sub>

この時、(13)と同様に VP1 と VP2 の目的語が意味的に異なるため、DHFR では ACD が非文となると説明できる。

### 4. 結論

本発表では、Nakamura (2009) の観察に対して、実際は DHFR の関係節の積み重ねが不可能であるという新たな事実を示し、Nakamura による ACD の分析が妥当ではないことを示した。そして、*what* を *wh-* と *-at* に、さらに *-at* を *SOME* と *THING* に分解する複雑な方略は取らず、標準的自由関係節に冠詞 (D) が併合する単純な派生による説明を提案した。これにより、Nakamura が抱える分析が複雑であるという問題が解消された。

### 参考文献

Matsuyama, Tetsuya (2018) "Transparent Free Relatives," *English Linguistics* 34: 2 235-265. / McCawley, James (1998) *The Syntactic Phenomena of English 2*, University of Chicago Press, Chicago. / Nakamura, Taichi (2009) "Headed Relatives, Free Relatives, and Determiner Headed Relatives," *English Linguistics* 26: 2 329-355. / Sauerland, Uli (2004) "The Interpretation of Traces," *Natural Language Semantics* 12, 63-127. / Schelfhout, Carla, Peter-Amo Coppens and Nelleke Oostdijk (2004) "Transparent Free Relatives," *Proceedings of CONSOLE XII*. / Wilder, Chris (1998) "Transparent Free Relatives," *Proceedings of WCCFL 17*, 685-699, CSLI Publications, Stanford, California.